

「核不拡散体制の成立と安全保障政策の再定義」

第9回公開研究会

講師：栗田真広 氏

日時：2018年12月8日（土）

15:30～17:30

場所：政策研究大学院大学 講義室5F

インド・パキスタンの核政策—その変遷と継続性—

○岩間氏 土曜日にもかかわらずお越しいただき、ありがとうございます。それでは今日の研究会を始めたいと思います。

今日のテーマは「インド・パキスタンの核政策—その変遷と継続性—」ということで、今日の講師は大変お若い方です。一橋大学社会学部を御卒業なさった後、そこで博士課程を修了され、国会図書館調査及び立法考査局調査員などを経て、現在は、防衛研究所地域研究部研究員をされています。御専門は特にパキスタンと伺っています。栗田真広さんに御発表をお願いします。

この研究会はヨーロッパ研究者がまず中心になって発足しましたので、インド・パキスタンはなかなか発表していただける方がいないので、今日は本当に貴重な機会を楽しみにしております。では、よろしくお願いいたします。

○栗田氏 岩間先生、御紹介ありがとうございます。お招きいただき、ありがとうございます。防衛研究所で研究員をしております栗田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

先ほど本日参加される方のリストを拝見しまして、私、個人的にすごく安心したのは、インド研究者の方が誰もいらっしゃらないということです。いらっしゃらないですよね？先ほど岩間先生からも御紹介いただきましたとおり、私はパキスタンのことをもともとやっております、特にパキスタンの核戦略を専門にやっております。ただ、最近ですと、日本国内で特にインドとの関係強化だとか、そのあたりに関する議論が盛り上がるのが非常に大きいので、そのインドと対立する側の研究者としては、なかなか肩身の狭い思いをしているところです。一応インドとパキスタン両方の話を今日もさせていただくのですが、若干パキスタンびいきなところがあるかもしれませんが、割り引いて聞いていただければと思います。よろしくお願いいたします。

今日の本題は、インド・パキスタンの核問題に関してどういう観点から捉えていったらいいのかということです。まず初めに確認しておきたい点として、印パの核問題というと比較的新しい問題だというイメージが持たれやすいのですけれども、どこから数えるかにもよりますが、一般的に印パ間の関係が核保有国間の対立になってから、今日で約30年が経過したと言われております。

皆さん恐らく御記憶にあるのは 1998 年の核実験、5 月でしたかね、あのときの核実験までには、印パともに既に約 10 年間、De Facto Nuclear State、事実上の核保有国として存在してきました。そこからさらに 20 年たっているということは、核保有以降、約 30 年間で既に経過したということです。これだけの期間、なおかつ非常に軍事的にホットな形で続いてきた核保有国間の対立は、今日まで印パを置いてほかにはないだろうと私は思っております。

この印パの核問題というのも、当然その長い歴史の中でさまざまな観点から語られてきたわけですが、この問題に関する研究は、大きく 3 つのステージに分けられます。

まず最初にこの問題についての研究の主題となったのは、核開発の動機です。これは何も印パに限らず、80 年代から 90 年代にかけて例えばイラクとかシリアとかイランとか、あとは北朝鮮の核問題が盛り上がってくる中で、国家の核開発の動機は何なのかというところで印パの問題が扱われ始めたというのがスタートだったかと思います。

その次に出てきたものとして、スライドにも載せています、*The Spread of Nuclear Weapons* (Scot D. Sagan/ Kenneth N. Waltz, 1st edition 1962)、恐らく読まれた方も結構いらっしゃると思うのですが、この本の中でケネス・ウォルツとスコット・セーガンが繰り広げた、核保有の結果として抑止は機能するのか、結果的に核戦争は起こりやすくなるのかならないのかという点についての論争があったわけです。その中で、印パに関しても当然この論争がありました。80 年代から 90 年代にインド・パキスタン両国が事実上の核保有に至ってからしばらくの間は、印パ間で幾つかの軍事危機が相次いだということもあって、このウォルツとセーガンの言っていることのどちらが正しいのかを検証する一つのケースとして印パが捉えられた面があります。そうした、いわゆる核の拡散の帰結に関する研究というのが、かなり長く印パの核問題に関する研究で主流を占めまして、逆に言えば、その次の段階としての、両国の核戦略・核体勢の選択の中身に関する細かい研究というのは、かなりの程度遅れてきたと言えます。インドの核戦略・核体勢の研究に関しては、2000 年代の半ばぐらいから少しずつ出始めましたが、パキスタンに関して、核開発の歴史ではなく核戦略に関する体系的な研究としては、2009 年にイギリスの Bhumitra Chakma という学者が出した *Pakistan's Nuclear Weapons*(2019) という本が恐らく最初の体系立ったと言える本だったのではないかと思います。逆に言えばそれぐらい、核戦略・核体勢の選択に関しての研究が遅れてきたということになります。

そうした形で印パの核問題が研究されてくる中で、両国の抑止関係のあり方や、核政策

上の両国の選択は、**Regional Nuclear State**、地域の核保有国の先駆的事例だと捉えられるようになってきました。その中で恐らく皆さんがイメージされる、パキスタンは非常に危険な核保有国だというイメージが作られてきたのだと思うのですが、さらに言えば、そのパキスタンの経験によってつくられた新興核保有国は危険だというイメージは今日かなりの程度拡散しているようなところがあると私は感じておりまして、それは例えばイランが核を持ったら何をするかだとか、北の核保有の話についてもそうで、特にアメリカなどでは、そうした議論にパキスタンのイメージが投影されている面があるのかなと思っております。こうした観点から印パの核問題を今日は見ていこうと思います。

ついでに御紹介しておくと、こっち (*The Spread of Nuclear Weapons*) は見たことがある方も多いと思うのですが、これ (Sumit Ganguly and S. Paul Kapur, *India, Pakistan, and the Bomb: Debating Nuclear Stability in South Asia*, Columbia University Press, 2010) を見たことある方はいらっしゃいますか。結構おもしろいのですが、ウォルツとセーガンのディベートになぞらえて、印パ間で果たして核兵器を保有したことによって両国間の関係が安定したのかという点を、南アジアの核問題で比較的重鎮ともいえる学者が両方の立場から論じた本で、このセーガン、ウォルツの論争を読んだ後に読むと、実際一つのケースでどうなったかというのが見えてきます。もしよかったら読んでいただければと思います。

ということで、今日は主に核問題の話をさせていただくのですが、その前に少し、前提になる話をさせてください。そもそも印パが核を保有する原因になった、インドとパキスタンの対立とは、どういう関係なのかというのを御説明しておきます。

印パの対立は、3つの観点から語れるだろうと私は思っております。

1つは永続的な対立です。**Enduring Rivalry** という概念が紛争研究の中ではありますが、その一番顕著な例として挙げられるのが印パ対立で、要するに解決の見込みが全くないままに非常に長い間続いてきた紛争ということです。もともとの起源をさかのぼると、1947年の独立時にいわゆるカシミール地方の領有権問題をめぐって印パ両国は対立関係に陥りました。それから何度も和平努力が繰り返されてきましたが、近年もやっていますが、繰り返されて、何度も頓挫して、実際には全く解決の見込みが見えない紛争です。これが1つの特徴です。

2つ目に、非常に高度に軍事的な様相の濃い対立ということが挙げられると思います。印パ間では実際過去4回、数え方によっては3回ですが、戦争と呼んでも差し支えない

ようなレベルの軍事衝突が起きています。最初の印パ戦争が 1947～1948 年に起きて、1965 年には第 2 次印パ戦争が起きています。それから、1971 年には今のバングラデシュの独立問題に絡んで第 3 次印パ戦争が起きて、その後、1999 年にいわゆるカルギル紛争という印パ間の限定戦争が発生しています。

それに加えて、1999 年以降、両国の正規軍間（注：カルギル紛争は厳密にはインド軍とパキスタンの準軍事部隊の衝突）での大規模な衝突というのは起きていないのですが、一方で、今日でもやんでいないのが、パキスタンが支援しているとされるインドの国内でのテロや反乱です。具体的な例で主要なところを挙げると、例えば 9.11 の 3 カ月後に起きたインド国会の襲撃事件というのがあったのを御記憶の方がいらっしゃるかと思います。あとはもう少し最近ですと、約 10 年前、2008 年 11 月末に起きたムンバイ同時多発テロがありました。日本人の方もたしか巻き込まれたかと思いますが、170 人弱の犠牲者が出ているかと思います。これらのテロの背景にいたのはパキスタンの軍統合情報部（ISI）で、それが支援しているテロリストがこれらの事件を起こしたのだと言われています。こうした主要なテロ事件以外にも、今日でも散発的に、より規模は小さいですが、インドの国内でパキスタンの支援が疑われるテロ行為はやんでいません。

3 つ目の特徴を挙げるとすれば、印パ対立はさまざまな意味で非常に非対称的な対立と言えると思います。

まず、次のスライドを見ていただくとわかりやすいのですが、両国はそもそも非対称的な関係です。人口で見ても、国土面積で見ても、経済規模で見ても、軍隊規模で見ても、何で見てもインドのほうが圧倒的に大きいのです。ですので、軍事的には対称的なアプローチで向き合うと、パキスタンというのは到底インドに対して対抗することはできない。それにもかかわらず、パキスタンは屈服させられることなく、紛争は 70 年間続いてきた。そうした非対称的な関係にもかかわらず、紛争を継続していくために、パキスタンはさまざまな形でこの不均衡を相殺するためのイコライザー（等化器）というのを模索してきました。その等化器の例が大国との同盟関係であり、そして今日の本題でもある核抑止力であるということです。

もう 1 つ非対称性の例を挙げるとすると、印パともにカシミール地方という実効支配地域を押さえて相手側の支配地域を返せと言っているわけですが、両者の間でスタンスには微妙な違いがあります。建前上はともかく、インドは現状の実効支配の構図に比較的満足していると言われてきました。絶対に公言はしませんが、一方で、この現状に耐えられな

いのがパキスタンで、インドの実効支配地域を取り返したいと考えてきたということになります。片方は現状打破、もう片方は現状維持という構図が、2つ目の非対称性です。

3つ目の非対称性ですが、インドにとっては印パ対立が全てかというところ、そういうわけではないというのは恐らく皆さん御承知のところかと思います。インドにとってより重要なライバル関係は中国との間にあって、中国に対するキャッチアップというのはインドにとって常に重要な目標であった。それに対してパキスタンはというと、もちろんアフガニスタンとの間の国境問題だとか、ほかにも幾つか対外的な問題はありますが、それでもやはり何よりもインドに対抗することを考えてきた国です。それゆえ、この対立にかかっているものの大きさという意味でも、印パの間には非対称性があります。

さっきのスライドのさらに次へ進んでいただいて、その印パ間にあるカシミール問題についても少し触れておきたいと思います。

印パの対立の根本的な原因はカシミール問題だと言われています。カシミール問題というのは、簡単に言ってしまえば、両国の分離独立のときに解決できなかった問題が今まで残っているものです。御承知のとおり、もともとインドもパキスタンも、さらにはバングラデシュもミャンマーも旧英領インドの一部として形で第二次大戦終結を迎えたわけですが、第二次大戦の後、印パがそれぞれ独立をするときに、旧英領インドの中のイスラム教徒の多数派地域を集めて独立したのがパキスタンという立て付けになっています。旧英領インドという中には幾つかの種類の地域があって、イギリスの直轄支配のところもある一方、藩王と言われる小領主が治めていた国が数百単位で存在していて、印パの独立に際して、それぞれ印パのどちらに帰属するかを全て決めていったのですが、最後までインドに帰属するかパキスタンに帰属するか決まらなかったのがこのカシミール地方でした。

なぜ決まらなかったか。地理的にインドとパキスタン両方に接する位置にあるということで、どちらにつくかそもそも選択の余地があったというのが1つなのですが、より根本的なのは、このカシミール地方を治めていた藩王がヒンドゥー教徒だった一方、住民の多数派の宗教と一致しなかったこと。インドは必ずしもヒンドゥー教の国ではないのですが、実態としてはヒンドゥー教徒が多いので、藩王はインドへの帰属を望んだわけです。一方で、この地域の多数派を占めていたのはイスラム教徒だったので、彼らはパキスタンにつきたかった。ということで結果的に折り合いがつかず、印パの間でこの地域をめぐる争いになり、戦争になったのが第1次印パ戦争ということになります。今でもこの戦争の後にできた実効支配地域とそれに基づく分割支配がおおむね引き継がれていて、地図上でお

示している左上の緑の地域がパキスタン、右下の黄色の地域はインドが押さえている地域ということになります。

それぞれお互いに相手が不法占拠していると言っているのですが、パキスタンの方がどちらかという現状を変えたいと思っている。ただ、この地域全域の帰属を決める住民投票をやるべきだとパキスタンは言っています。一方でインドは、第 1 次印パ戦争のときにインドとこの地域を治めていた藩王の間で結ばれた併合文書が有効であり、それによればこの地域全部がインドのものだという立場をとっています。

なぜこのカシミール問題がそんなに解決しないのかについては、非常にいろいろな問題が指摘されています。正直どれが本当なのかわからないくらいで、例えば両国の国家アイデンティティの衝突などいろいろなことが言われているのですが、1 つには歴史的にどんだんこの問題が複雑化してきたというのがあります。例えばインドとパキスタンの間で何度か戦争が繰り返されて、第 3 次印パ戦争でインドが勝った後の 1972 年に、この問題に対して第三国を巻き込まないで二国間で解決するという条項が両国間の協定に盛り込まれたことや、先ほどのパキスタンによるインド国内でのテロ反乱支援が、このカシミールのインド側実効支配地域で最も活発に行われていることも関係しています。その結果、パキスタンの支援が疑われる反乱がこの地域で非常に活発になってきたのですが、一方で、そうした反乱が全てパキスタンの介入のせいかという、そこがよくわからない。インド側がこの地域をうまく統治できていない結果として、パキスタンにつけ入る余地を与えているという側面も否定はできないのです。

さらに、印パ両国の国内で、このカシミール地方で妥協することを許さない勢力がどんどん育ってきたことがあります。何より有力なのはやはりパキスタンの軍隊、特に陸軍で、軍政の時期だけでなく、文民の政権の時期であっても、パキスタン政府がインドに対してカシミール問題で妥協することを決して許さない。一方で、インドの国内にも同じような勢力がいます。今のモディ政権のインド人民党の母体のいわゆるヒンドゥー原理主義的な勢力というのは、やはりパキスタンに対してこの問題で妥協することを非常に嫌います。そういった国内政治との関係もあって、カシミール問題はこじれてきたというところを押さえておいていただければと思います。

というところまでが前置きで、ここから核政策の大枠に入っていきます。具体的なところはこれからご説明しますが、全体に通底する話として、パキスタン・インドそれぞれの核政策の大枠をまずは説明しておきます。

ここでパキスタンについて指摘しておくべき項目は4つあると思っています。

まず第1に、パキスタンの核兵器というのは何のための核兵器なのかという点。これは基本的には1つで、対インド抑止のための核兵器、インドに対する軍事的な不均衡を相殺するための核兵器というのがパキスタンにとって核兵器の唯一の目的です。印パ間の問題に余り詳しくない人の中には、印パはカシミール問題という限定的なイシューに関してのみ争っているだけなのだから、核兵器がかかわってくるような紛争にならないんじゃないかということ言う人たちがいるのですが、パキスタンは全くそう考えていません。確かに印パ間のイシューはカシミール問題なのですが、パキスタンでは歴史的な経験から、特に軍だとかいわゆる安全保障関係の人たちは、インドは今でもパキスタンという国家を滅ぼそうとしている、パキスタンの国家の存続を脅かす存在であると今でも本気で思っています。ですので、いわゆる **existential threat** としてのインドというのが彼らの頭にはあって、それをどうやって抑え込むかという点で核兵器が出てくるわけです。

さらに、なぜ彼らがそういう頭でいるかということ、一度インドにそういう目に遭わされたからです。1971年のバングラデシュ独立の際に、もともとは東西パキスタンの東パキスタンだったバングラデシュと、現在のパキスタンに当たる西パキスタンの間の内乱に、インドが介入して国家を分断して、事実上人口の半分以上を持っていく形でバングラデシュが独立した。これと同じことを繰り返されることだけは何としても避けたいとパキスタンは今でも思っています。

ということで、対インド抑止の中でも何を抑止したいかといえ、この経験を繰り返すことをパキスタンは抑止したいと思っています。つまり、インドの優勢な通常戦力によって屈服させられることをどう抑止するかということで、パキスタンの核政策は何よりもここからスタートしました。もちろんインドの核攻撃の抑止というのも頭にあるのですが、第一義的には対通常戦力抑止があって、それから対インドの核攻撃抑止ということになります。

2つ目に、パキスタンの核政策というのは軍の多大な関与のもとに進められてきています。これには紆余曲折あったのですが、基本的には1993年ごろから核開発プログラムが事実上陸軍のコントロール下に入ったと言われています。

それから3点目、後で詳細に触れますが、曖昧性の重視があります。インドや米国とは違って、パキスタンはいわゆる核ドクトリンに関する体系的な文書というのは全く公表していません。ですので、断片的な当局者のステートメントだとか、あとは軍関係者、退役

した軍・政府関係者などが非公式的な形でどんなメッセージを発しているのかというところから、核政策を読み取ることが重要になってきます。

それから 4 つ目、ここは御承知の方も多いと思いますが、中国・北朝鮮との協力というのがパキスタンの核政策にはありました。中国とは 1980 年代から 1990 年代にかけて核物質だとか弾頭のデザインも供与されましたし、あとはパキスタンの今の核戦力の柱になっている、固体燃料式のシャヒーンシリーズという弾道ミサイルは、中国の M シリーズのリバースエンジニアリングだと言われています。北からは何をもらったかという、ノドンをもってガウリという液体燃料のミサイルを作りました。ただ、最近、液体燃料ミサイルの方はどうもパキスタンとしてはあまり重視していないように見えます。

次に、パキスタンの核政策の歴史の話、核兵器の開発がパキスタンではどのように進んでいったのかをお話しします。

簡単に言えば、1971 年の第 3 次印パ戦争で、先ほども述べたバングラデシュ独立という目にインドによって遭わされたということがあって、これに関する“Never Again”というのがパキスタンの核開発の始まりでした。この戦争の中でパキスタンは 3 つのことを悟ったと言われていて、1 つは通常戦力での防衛の限界です。皆さん信じられないかもしれませんが、あれだけの軍事力の不均衡があっても、この戦争まではパキスタンは通常戦力でインドに対抗できると思っていたのです。その背景には、彼らが文化的にインドを低く見ていたとか、あとは旧西側と同盟していたパキスタンは、東側に近かったインドよりも先端の装備を導入できたことだとかいろいろあるのですが、それが可能だと思っていたら、この戦争で完璧に屈服させられたというのが 1 つ。

それから 2 つ目に、同盟国への不信。パキスタンが当時期待したのは、アメリカと中国が助けてくれることでした。ただ、この期待がどこまで客観的に正当なものだったかはともかく、実際にはアメリカも中国も助けてはくれなかったわけです。ですので、同盟国に頼ることもできないと思ってしまった。

3 つ目に、先ほどのところとかかわってきますが、インドは究極的にパキスタンを滅ぼそうとしている、パキスタンという存在と一緒に生きていくつもりはインドにはない、というインドの究極的意図への疑念を持ったのもこのときでした。ですので、非常にわかりやすく、1971 年 12 月にこの戦争が終わった後、年が変わって 1972 年 1 月にパキスタン政府は核開発を決定するわけです。さらに、この核開発を決定した後にそれを加速させたのが、1974 年にインドが平和的と銘打って行った核爆発実験でした。

この核開発は当然簡単に進んだわけではありません。特に 1970 年代という、カーター政権が非常に厳しい不拡散政策を取っていた時期ですので、パキスタンはアメリカの同盟国でありながら、その制裁の憂き目に遭ったところがあります。ただ、1979 年にソ連がアフガンに侵攻すると、御承知のとおりパキスタンはソ連をアフガニスタンからたたき出す上で不可欠の同盟国になります。西側は、パキスタンの情報機関 ISI を通じてアフガニスタン国内でムジャヒディンと呼ばれる武装勢力を支援して、そのムジャヒディンの武装闘争によってソ連をアフガニスタンから追い出したわけです。

この対ソ代理戦争を守るために、パキスタンとアメリカの間に暗黙の了解が成立したのが 1980 年代です。いわゆるホットテスト、爆発を伴う核実験をしないというのがこのときの暗黙の了解だったのですが、1980 年代末にソ連が撤退すると、1990 年にはアメリカはパキスタンに対して核開発を理由とした制裁をかけます。これがプレスラー修正条項と言われるもので、パキスタンは今でもこれをすごく恨んでいます。ですが、この 1980 年代にかなりの程度彼らが核兵器開発を進めたのは事実で、恐らく 1987~1989 年ごろに、パキスタンは事実上の核保有に至っただろうと言われていました。

その辺りの時期に、パキスタンにとって核抑止力がいかにインドに対して役に立つかを印象づけた、2 つの事件がありました。どちらもインドとの軍事危機なのですが、1 つには、1986~1987 年にかけてインドが非常に大規模な軍事演習をやった際、戦争になるかも知れないと言われたものの、実際にはインドは攻めてこなかった。1990 年にも似たような事件がありました。実際インドがなぜ抑止されたかというのはともかく、パキスタン自身はこれらをいかに核兵器の抑止力が効いたかという証左であると捉えたと言われています。その後、1980 年代末から 10 年ほど、核兵器を作れるが作らないという微妙なスタンスを取った上で、1998 年 5 月、インドに対抗して核実験を行いました。

では、その核実験を行った後、パキスタンはどういう核戦略をとったか。パキスタンは非常に危険な核政策をとっているというイメージが広く受け入れられているように思うのですが、実は少なくともこの時点ではそうではなかった。

パキスタンはこの核実験の後、ドクトリンの文書は全く公表していないのですが、幾つか非公式の発表だとかそういったものから、彼らがどういう核政策をとろうとしているかというのを描き出しています。そこで挙げられていた要素を並べると、スライドの一番上のところに掲げている 4 項目になると言われています。1 つは、いわゆる残存性、survivability を重視した最小限の信頼性ある抑止力の構築。それから、いわゆる対価値タ

一ゲティングの採用。相手国の核戦力だとか軍事目標ではなく、相手国の都市などを攻撃する対価値攻撃の示唆をした。それから、パキスタンはインドの通常戦力を抑止しなければならないので、いわゆる先行核使用、相手が先に核兵器を使わなくても核兵器を使うという先行核使用の権利を留保するわけですが、一方で、それはいつでも軽々しく使うわけではなく、彼らに言わせれば、最後の手段（last resort）だということ。そして、核兵器の使用の権限に関しては集権的な統制をすること、具体的には政府と軍の指導部から成る国家指揮部（National Command Authority）というのを作って、そこから完全に通常戦力の指揮系統とは分離した形での、戦略軍（Strategic Force Command）に至る指揮統制のラインを構築すること。これらが、彼らがこのとき打ち出したメッセージだったわけです。

一方で、例えば西側からは、パキスタンが実際にこうした方針を採用してはおらず、いわゆる戦術的な核使用、攻めてくるインドの軍隊などに対する核兵器の使用などを行うのではないかという指摘がしきりに出てはいました。ですが、少なくともこの時点で、パキスタンの核政策のトップを務めていた Khalid Kidwai という陸軍の中将は、一切の戦術核兵器の必要性を排除している、核使用決定権限の 99%は政府のトップが掌握しているということを、イタリアのメディアとのインタビューで言っていました。そういう意味で、いわゆる Nuclear War-Fighting、冷戦期の核戦争の遂行だとか、それに準ずる概念はとらないというのが、彼らのポジションだったわけです。

ただ、そもそもなぜ西側からそういう指摘が出たか。それは冷戦期の経緯からすると非常にわかりやすい。お互いに相手国を破滅させられるだけの戦力を持った状態で核攻撃以外の、通常戦力の行使などを核報復の威嚇で抑止しようとする、いわゆる信頼性（credibility）の問題が出てくるわけです。冷戦期の NATO が悩んだのはこの点でした。元々冷戦期に Glenn Snyder が言った「安定—不安定のパラドックス」とはそういうものです。そうした信頼性の問題が出てくるにもかかわらず、こうした相対的に穏当な、いわゆる確証報復と言われるようなものに近い核態勢によって、どうやってインドの通常戦力行使を抑止するのか。それは無理だろうと。だから、実際にはそうでないことをパキスタンは考えているのではないかと指摘が、西側からはしきりに出たわけです。ただ、パキスタン人に言わせれば、彼らはそれとは違うロジックを考えていたといいます。彼らは、何より抑止の根幹にあるのは曖昧性と、そこから来る不確実性だと言っていたわけです。つまり、いつ、どのタイミングで、どのような核兵器の使い方をするか、それらに関して曖

味性を保っておくことだと。

例えば、パキスタンがどういうときに核兵器を使うのかについて、先ほどの **Kidwai** という人が 4 つのレッドラインがあるということを言ったりなどしているのですが、それらを聞いていても、どういうときに核が使われるのか、非常に曖昧なのです。さらに、パキスタン自身が言っていることとは別に、西側では、パキスタンが戦術核使用をするだとか、そういう言説がある。そうした中でインドが通常戦力の行使に訴えたら、いつどのような形でパキスタンから核報復が返ってくるかわからない、それが曖昧性。さらにそれが当然印パ間の全面核戦争にエスカレートしかねないという不確実性。この曖昧性と不確実性に依拠した形で、対インド抑止を担保するというのがパキスタンの考え方だったわけです。

パキスタンは恐らく、2000 年代の半ばごろまでこうした核政策をとっていたらと思う。1 つ注目すべきなのは、2005 年に当時大統領兼陸軍参謀長だった **Musharraf** が、**Minimum Deterrence** の目標に到達したと宣言したことです。このとき核弾頭は大体 60 個程度だったと言われていますが、それで目標に到達したということは、その後目標が変わった可能性はともかくとして、少なくともこの時点ではそれほどたくさんの核弾頭を必要とするような戦略を志向していなかったことを意味します。先ほど述べたような、比較的穏当な核態勢に沿うような核戦略を描いていたのだらうと思われるわけです。運搬手段に関しても、大体 2000 年代の半ばごろまでパキスタンは、長射程で比較的精度に欠けるような弾道ミサイルの開発に注力してきました。

ただ問題は、2000 年代の半ばからパキスタンを取り巻く戦略環境が変化し始めたことです。インドがいわゆる **Cold Start** という限定通常戦争ドクトリンを持ち出し始めたのです。少し背景をお話すると、インドとパキスタンの間では核保有以降何度か軍事危機が起きていて、最も新しいのは 2001～2002 年に起きたものですが、インドが非常に大規模に、数十万の軍隊を動員してパキスタンに強制外交をかけたけれども、要求をのまされなかったし、武力行使にも踏み切れなかった。なぜか。それは核兵器があるからで、お互いに相手国を滅ぼせるだけの核戦力を抱えている状態で、そうした大規模な通常戦争には訴えられない。そうするとインド側としては、それでもパキスタンがテロ支援を続けていることに対してどう対処していけばいいのかが問われる。相互核抑止の下でも行使できる懲罰の手段が必要だと考えるわけです。ではその手段とは何か。パキスタンが核使用に訴えるレッドラインを踏み越えないような、言い換えればパキスタン自身が言う **last resort** を持ち出させないような、限定通常戦争なら可能なのではないかというのが、インドの考えで

した。

さらに、その限定通常ドクトリンを支えるような形でインドの通常戦力の増強が進んでいって、印パ間の通常戦力不均衡がどんどん拡大していったのもこの時期です。結果として、インドの通常戦力行使を抑止するに際しての核抑止の信頼性の問題を、先ほどの曖昧性によって克服しようとパキスタンは思っていたのが、その問題が逆にどんどん深刻化していったということになります。

そこでパキスタンは何をしたか。2000年代の後半から、特に2010年代に入って以降、パキスタンは核戦略と核態勢をシフトさせていったと言われていています。それを象徴するのは2つの出来事で、時系列的に言えば、第1にパキスタンはプルトニウムの生産能力拡大を始めました。2000年代の後半から兵器級のプルトニウムを作るための施設の建設が進んでいきます。もう1つは、2010年代の頭に入って、短射程の弾道ミサイルをどんどん登場させていったことです。この文脈で最もよく触れられるのが、ナスルと呼ばれる2011年に実験された射程60kmの戦術弾道ミサイルです。こういった短射程のミサイルを、パキスタンが登場させ始めた。そうした中で2013年には、パキスタンの文民政治家と軍指導部から成る、核政策に関する最高意思決定体である国家指揮部から、あらゆる形態の侵略を抑止するため、full spectrumの抑止を維持するというステートメントが発出されました。

これらが果たして何を意味するのか。西側、特にアメリカでこれらを受けて言われるようになったのは、パキスタンはNATOと同じ道をたどっているということでした。すなわち、戦術核兵器による限定的な核使用オプションに依拠して抑止の信頼性を回復させる、NATOのいわゆる柔軟反応(Flexible Response)戦略と同じ考えのもとに動いているのではないかと、という見方が、2010年代からの通説になっていったのです。

核戦力の一覧のところは飛ばします。どんなミサイルがいつから出てきたのかについては、後で適宜ごらんください。

ただ、そうしたパキスタンの核政策上の2010年代からのシフト、これが全範囲抑止へのシフトと言われるわけですが、それが意図するところは果たして何なのかについては、アメリカの専門家の間でもかなり議論が割れました。この戦術核兵器をもってパキスタンが何をしようとしているのか。単純に見て、いわゆるNuclear War-Fighting、限定的な核戦争の遂行を追求しているのではないかと考えた人たちが一方にいます。つまり、印パそれぞれが戦略核レベルでの抑止というものを担保している状態で、インド側は限定的な核使用オプションを持っていないとされるので、戦略核レベルの抑止の下で、インドの通常

戦力に対してパキスタンは追加的な火力として戦術核兵器を使って、限定的な核戦争を遂行するということを考えているのではないか、との見方です。

もう一方には、そうではないとの見方もあります。パキスタンの戦術核兵器は恐らくそのような戦場での軍事的な有効性を念頭に置いたものではないと言った人たちがいたわけです。後者の立場をとった人たちの根拠には色々あるのですが、1 つには、パキスタン自身が、そうした戦術核の活用を考えているとすれば不自然なことを言っている点があります。彼らが今でもよく言うのは、全範囲抑止というのは戦争遂行のドクトリンではないという点です。それから、戦術核兵器を使った純軍事的な戦争の遂行を有効に行うための必要な手続、例えば戦術核兵器の事前配備や、前線の司令官に対しての核使用権限の事前授権、通常戦力との指揮系統の統合などを、彼らは行っていないとパキスタン人自身は主張します。このあたりを見て、実際にどこまで本当に **War-Fighting** を考えているのかというのを疑う人たちが出てきたわけです。

では、実際のところどうなのか。1 つ注目すべきなのは、果たして本当にパキスタ人が、**War-Fighting** 上この戦術核兵器を有効に使えるのかということところです。これについては、特に 2010 年代の半ばごろから懐疑的な見方が多く示されるようになってきました。そもそも突撃してくる機甲部隊を止める上で、戦術核兵器というのが果たして本当に純軍事的に有効なのかという見方が 1 つ。それから、エスカレーションの制御、限定核戦争が限定で済まなくなることを回避するのが非常に難しいという問題。この点に関しては、パキスタン人自身が、ほとんどこのエスカレーション制御に関する議論を彼らの戦略言説の中で論じていません。それから、パキスタン自身にとっての障害ではありませんが、冷戦期の米国や NATO にとってですら、この手の **War-Fighting** というのをどのようにやっていくかというのは難しい問題だったわけです。

結果として今日に至るまでに、パキスタンの戦術核兵器が **War-Fighting** の手段として有効ではないというのは、インド側ではほぼ通説になっています。インドの戦略コミュニティや元当局者の発言を見ていると、様々な理由を並べて、結果的にパキスタンの戦術核兵器は純軍事的には有効ではない、という主張が有力なのです。ただ、不思議なことには、パキスタン側で、明らかに政府や軍の意図を反映する形でメッセージを発しているような当局者の非公式な言及だとか、もしくはリタイアした人たちの言説などを見ても、パキスタン側からの反論というのは、戦術核兵器が抑止のための有効な手段であるということをも主張はしても、それが軍事的にどのように有効なのかということに関する反論は、ほ

とんど出てこないのです。

だとすれば、果たしてパキスタン自身は戦術核兵器についてどう考えているのか。私は恐らく先ほどの 2 つの見方のうち、後者が正しいのだらうと思います。それはつまり、これは純粋な War-Fighting の兵器ではなくて、それとは別の論理によって抑止を担保する手段であることを意味します。パキスタンの軍関係者がこの議論をするときに必ず言うのは、核兵器に戦術も戦略もないという点です。戦術も戦略もないというのは、敷衍すると、限定核戦争は成立しないということになる。戦略と戦術の間にファイヤーブレイクがないと、戦術核兵器を用いた「限定」核戦争は成立しません。では、彼らはなぜそうした理解にあえて言及するのか。これに関して、パキスタンの陸軍戦略軍の高位のポストを務めた人が興味深いことを言っていて、戦術核兵器は意図せざるエスカレーションの不確実性を生むが、それこそが戦術核兵器の抑止力だと説明しているわけです。

これと、先ほど触れた、パキスタン軍人がしきりに言う、核兵器に戦術も戦略もないという認識を考え合わせると、何が言えるのか。パキスタンが少なくともここまでの約 10 年間、戦術核兵器に見出してきた役割というのは、恐らくそれによる War Fighting ではない。戦術核兵器は、相対的に戦略核戦力よりもパキスタンにとって使用するハードルが低いかもしれない兵器である一方、たとえ限定的な破壊力しかなくても、それがいったん使われたら、いつ戦略核戦争へのエスカレーションを引き起こすかわからない不確実性を生み出す。戦術核兵器を、こういう不確実性を担保するためのツールと考えると、戦術核兵器導入以前からのパキスタンの核戦略・核態勢との親和性が見えてくるということになります。つまり、よりラダーの低いレベルでのインドの軍事力の行使に対しても、この種の不確実性に立脚した抑止を機能させるようにするためのツールとして、パキスタンは戦術核兵器を位置づけているのではないかと思われるのです。

すみません、ちょっとパキスタンについてしゃべり過ぎました。少し駆け足で、ここからインドの説明をしていきます。

インドについても核政策の大枠から説明していきませんが、ここでは 3 つの点を指摘しておきたいと思います。

インドの核兵器は、安全保障以外にも、さまざまな理由で進められてきたと言われていきます。ただ、細かく見ていくと、安全保障面ではインドは誰をにらんでいたかと言えば、中国とパキスタンです。ただ、脅威の性質というのは中パの間でも違って、中国というのはより抽象的な、インド人の言葉をかりれば politico-strategic な脅威だと彼らは言うわけ

です。なおかつ、キャッチアップの対象でもあります。一方、より軍事的に差し迫ったものがパキスタンの脅威です。今日は印パの核抑止の問題という形で話を組み立てておりまして、中国に対するインドの核政策の側面はあまりお話ししないのですが、それはこの点と関連していて、具体的に核戦略の細かいことを考えられるほどにインドの対中の核政策というのは詰められていない、今日でも実存的抑止のレベルを出ないと言われているためです。

安全保障以外でインドにはもう 1 つ、核開発の重要な目的があります。それはステータスで、彼らにとって核兵器というのは大国としてのシンボルなわけです。ややこしいのは、この大国としてのシンボルやステータスというのが、ある種安全保障を担保するものと考えていることです。例えば植民地化された経験だとか、そのようなものと結びついて、十分軍事的ではない、politico-strategic な意味合いにおいての敵対国との対等性が、ある種安全保障を保障するのだという頭が彼らにはある。そのような考えに基づいて、この種のステータスのための核というのを追求してきたわけです。これは 1990 年代には、NPT の無期限延長だとか、CTBT に代表される既存の核秩序への挑戦といった形で現れていました。

このような側面があるがゆえに、インドの核政策が、「核戦力」を作るのではなくて「核兵器」を作ってきたというのは、よく言われるところです。インドの政治指導部は、伝統的に核兵器を政治的兵器だとずっと主張してきましたし、今でも言っています。それから、核兵器の開発を誰よりも駆り立ててきたのは科学コミュニティで、彼らは科学者として作りたいものを作る、獲得したい技術を追求しますし、政治指導部はこれを許容する。その背景には、植民地支配された経験などから出てくる彼らの認識の 1 つに、技術的に遅れると国家として立ち行かなくなるというものがある。だからこそ、国防科学コミュニティというのは作りたいものを作ることを許されてきたし、それは政治の側、政策の側がそれらをどう使うかとは、ある種切り離されてきたところがあります。

一方、そうした中で周縁化されてきたのが軍で、エンドユーザーの軍がそうした兵器を実際どうやって使うかというのは、かなりの程度政策のインプットには反映されないまま時間が過ぎてきましたし、現在でも、多少変化はありましたが、相対的に軍の発言力が弱いのは変わっていないと言われています。

インドの核開発の歴史についても説明しておきます。インドの核政策はもともと非常に歴史の古いもので、それこそ独立の直後から、有名な Nehru 首相の下で、必ずしも核兵器

開発ではないにせよ、原子力技術の開発プログラムが進められてきました。これは核オプション政策と呼ばれる政策で、基本的には平和目的・民生目的で原子力開発を追求する一方、それらの技術の軍事転用の可能性を決定的に排除するようなことはしない、というのが基本姿勢です。

インドの政治指導部というのは核兵器に対して非常にアンビバレントで、一方では本気で道徳的な観点から核軍縮を追求するイニシアチブをやってきた人たちです。ただ一方で、大国としてのインドというのが立ち行かなくなるようなことだけは絶対に受け入れられない。その中で安全保障がいかに重要なのかもわかっているし、そうした意味での核兵器の重要性もわかっている。これは平和主義で知られた Nehru ですらそうでした。その結果として、先ほどの核オプション政策に行き着くわけです。科学者には技術を追求させ、その軍事転用の可能性を閉ざすようなことはしない。ただ、明確にこれを軍事に応用することに積極的かという、そうでもない、というのがオプション政策でした。

そうしたインドが、その後徐々にではありながら、明確に核兵器開発へと進んだのには、いくつかの理由がありました。インドで最初に核開発の機運が盛り上がったのは、中国の脅威増大、1962年に中印戦争に負けて、1964年に中国の核実験があったことによるものでした。その後、紆余曲折を経て、1974年には最初の核実験、これは平和的なものと言っていますが、核装置を爆発させている。この後しばらくは核開発がいったん止まるのですが、パキスタンの核開発が1970年代末から進み始めたことでインドは焦ります。結果として核プログラムが再始動して、1980年代末に事実上の核保有に至ったと言われています。

そこから約10年たって再びインドは核実験に踏み切りました。その理由については色々言われていますが、1つ大きかったのは核不拡散体制との確執です。つまり、1995年のNPTの無期限延長があって、CTBTの交渉妥結が1996年にあって、その時点での核を持ついい国——その中にはインドの潜在的脅威である中国も含まれているわけですが——と持つてはいけない国の間の格差が永久に固定化されかねない。核を持つ側は、一向に約束した核軍縮に踏み出そうともしない。その不平等性への不満というのがインド国内で核兵器支持に集まって、1998年に核実験に踏み切ったと言われています。

その核実験の後、インドはどのような核態勢を形成したか。インドはパキスタンと違って公式に核政策を公表しています。いくつかの文書を出したり、高官の発言があったのですが、基本的に今日まで生きていて最初にして最後の公式のドクトリンは、2003年に出された公式の核ドクトリンです。1枚スライドを飛ばします。

ここで彼らは何を言っているか。重要な要素として、このスライド上に挙げたようなことを言っています。信頼性ある最小限抑止、それから NFU です。この公式ドクトリンの前に出した、核ドクトリンの草案でも NFU を掲げていて、その NFU を引き継いでこの公式ドクトリンでも NFU を掲げています。核兵器を相手が使わない限り自身も核兵器を使わないというものです。ただ、この 2003 年のドクトリンでインドが約束した NFU は厳密な NFU ではなくて、大規模な生物兵器ないしは化学兵器での攻撃には核報復の権利を利用するという条件をつけた上で NFU を宣言しています。

それから、大量報復原則。核報復は大規模で耐えがたい損害を与えるということを行っている。また、コマンド・アンド・コントロールについては、核指揮部（Nuclear Command Authority）という、パキスタンと微妙にネーミングの違う、政府の指導部から成る会議体というのを作っていて、それを通じて政治指導部のみが核使用を決定できると掲げた。

これらを総合してよく言われるのは、インドもいわゆる確証報復と呼ばれる核態勢をとっているということです。

この公式核ドクトリンは 2003 年に出て、以降一度も改定されていません。なおかつ、軍関係の文書だとか政府関係の高官の発言の中で、基本的にはこのドクトリンに示された核政策をずっと受け継いでいるという点が今日まで繰り返されてきています。インドの核戦力も、おおむねそういう政策に沿っています。ここは後をご覧ください。

こうした確証報復の核態勢にはどんな核兵器が必要かという点、基本的には残存性に優れた、相手国の都市などの価値目標を攻撃できる、それなりに限定的な戦力で、それに沿った核兵器の開発をインドは進めてきました。それがスライドの一番上の「第二撃能力の確保」のところで、弾道ミサイル開発が実はインドでは大分遅れてきたのですが、2000 年代後半から順次運用可能になってきています。それから、SSBN と、それに乗せる SLBM も開発していて、一応今年の 11 月に初の抑止哨戒を行ったと彼らは言っています。

ただ一方で、そうした第二撃能力の確保とは若干かけ離れた動きも、インドの兵器開発には存在してきました。それが例えば 1990 年代から始まったミサイル防衛の開発であり、さらに 2012 年には、いわゆる多弾頭の MIRV システムの開発を進めると言った。これは 1 つのミサイルに複数の弾頭を乗せて、相手国の核戦力を多数破壊できるようになるもので、どちらかという点 Nuclear War-Fighting に準ずるような、第二撃能力の確保とは離れた兵器システムの獲得に突き進んでいるのではないかとの見方を呼んできました。

さらには短距離ミサイルの開発をインドも進めてきました。そこに書いてあるとおりのくつかの巡航ミサイルとか戦術弾道ミサイルの開発をインドは進めてきています。これらも、相手国の価値目標を攻撃するにはどちらかという toward 向かないわけです。むしろ相手国の軍事目標、特に通常戦争の中での相手国の軍事目標だとか、比較的国境に近いところにある相手国の核戦力を攻撃するのに向く兵器です。これらを受けて、はたして本当にインドは、さっき言っていたような建前の核戦略・核態勢を維持しているのかという疑問が少しずつ出てきたわけです。

さらにもう 1 つ注目すべき点として、インド国内で、先ほどお見せした公式のドクトリンの見直しを推奨する議論というのが専門家の中で盛り上がってきました。元々は、実はインドの国内ではドクトリン見直しを推奨する議論が繰り返されてきていて、必ずしも新しい現象ではないのですが、2010 年代に入ってこの種の議論があらためて非常に盛り上がってきたところがあります。これがなぜかという、先ほど触れた、パキスタンの戦術核兵器の導入に触発されたわけです。具体的にどういう議論が起こったのか。大きく分けると 2 つのポイントに議論は集中しました。1 つは、先行不使用、NFU の見直し。相手に使われない限り使わないという NFU を見直して、核使用の要件を緩和すべきなのではないかというもので、理由はそこに挙げているようなものが提示されました。これともう 1 つ、大量報復原則の見直し論というのも出てきました。これはすなわち、相手国がどんな規模の核攻撃をかけてこようとも大量の核報復で応じるという原則を撤廃して、より限定的な核使用を可能にするような柔軟なオプションをとれるようにすべきというものです。この 2 つのポイントが議論の中心になりました。

元々の議論の経緯の、パキスタンの戦術核兵器導入に触発されたというところに照らすと、論理的には NFU 以上に、後者の大量報復原則見直し論につながりやすいと言えます。お互いに戦略核レベルで相互の核抑止が成立している状態で、パキスタンが限定的な核兵器の使用をしてきたとして、それに対してインドが大量報復で応じるとどうなるか。当然パキスタンから大量報復が返ってくるわけです。これは相互の破滅にしかならない。だったら、パキスタンの限定核使用に対してはインドも限定的に応じられるようにすればいいのではないかと。そうした考えが、2 番目の大量報復原則見直し論につながってくる。

ただ、事実関係からいえば、今日に至るまでドクトリンの改訂には全く至っていません。インド政府は基本的にはドクトリンを改訂したことは一切ないと言っています。なぜなのか。それは 1 つには、公式ドクトリンで定義された、比較的穏当ないわゆる確証報復と言

われる核態勢への支持が、国内でも非常に根強いというのがあります。もう少し具体的に言えば、あの種の核態勢をとっていることが、インドの抑制的な核保有国イメージを外交的に発信する上で有用であるとか、核戦力の規模を抑制できるとか、意図せざる核使用のリスクを高めないで済むとか、あとは冒頭でも触れた、インドの核政策の中で元々弱かった軍の役割というのを弱いままに抑え込んでおく上で、政治家の側にとってこうした核態勢が都合がいいということがあるといった点が指摘されています。

ただ、本当にこれらが理由の全てなのかと言えば、実は難しい。インドの中で、限定核使用を認めるべきだ、認めるべきでない、という議論に関して、実はもう少し着目しておかなければならない動きがあると私は思っています。はたしてさっき触れたような、ある種核戦略そのものとは離れた理由のみから彼らが限定核使用を導入しないのかというと、恐らく実はそうではない。インドの中で限定核使用を導入すべきではない、大量報復原則のままでいいのだと言っている人たちは何を言っているか。基本的にはこのスライド上で挙げた 3 つのことを言っています。①核攻撃を受ければ我々は大規模な報復をする、②戦略・戦術の区別には意味がなく核戦争は限定不可能である、③戦術核兵器に関してパキスタンは幻想を抱くべきではない、というのが、この立場のインドの人たちがよく言う議論です。

これを並べかえると実は非常に興味深くて、彼らが言うとおりの核戦争が本当に限定不可能だったとしたら、大規模に報復するという行為が本当に非合理的なのか。非合理的ではないのです。なぜかというと、相手国が限定的に核兵器を使ってきたのに対して、例えば限定的な核兵器の使用で応じたとする。しかしそれでも、さまざまなエスカレーションのダイナミクスによって結果的に核戦争を限定的に抑え込むことができない、全面核戦争に発展してしまうことが不可避だとするならば、相手国が最初に限定的に核兵器を使ってきた時点で、先に大規模な核報復を返してしまっ、相手国の核戦力や指揮統制機構を可能な限り破壊してしまうことの方が、相対的に合理的になる。その方が、最終的に自国がこうむる被害は少なくて済むかもしれないからです。そうすると、実は相手国の限定核使用に対する大規模報復の威嚇というのは、核戦争の限定不可能性を前提にする限り、非合理的ではなくなる。だからこそ、大量報復原則のままでいいんだと主張するインド国内の人たちは、核戦争は限定不可能であるという点と並べて、これを主張するわけです。1 つ注意しなければならないのは、インドは、核攻撃の対象に関しては公式ドクトリンで何も言っていないのです。相手国の価値目標を叩くとは一言も言っていない。逆に言えば、相手

国の核兵器を攻撃対象としてもオーケーなのです。

そうすると、実は限定核使用は要らないんだとインドの国内で今言っている人たちというのは、さっき述べたような核戦略そのものとは関係のない理由のみから言っているのではなく、ある種彼らなりの合理性があって、これを継続すべきだと言っているということになります。翻って、限定核使用を導入すべきだと言う人たちがこれに反論できているか、その反論が広く受け入れられているかというのと、先ほど申し上げたとおり、結果的にドクトリンの改訂には全くつながっていない、受け入れられていないわけです。なぜなのか。ここにもこの核戦争の限定不可能性に関する認識がかかわってきて、実はこの種の認識というのは、そういう限定核使用を言う人たちも含めて、ある種インド国内のコンセンサスです。文民・軍人、当局者・専門家を問わず、基本的にはこれはコンセンサスになっているとのです。それゆえ逆に言えば、インドの限定核使用推奨論というのは、パキスタンの戦術核攻撃にインドが限定的に応じたとして、その後どうなるのか、という疑問に基本的には答えられないのです。だからこそ限定核使用論が、政府の政策のレベルにまで受け入れられていかないとも言われています。

こうした事情もあって、インドの核ドクトリンは今日まで変わっていないと言われていたのですが、去年実は、こうした流れとは別な形の、インドの核戦略の転換があったのではないかという議論が非常に盛り上がりました。すなわち、インドがそういう限定核オプションではなく、むしろパキスタンを完全に武装解除するような、大規模な先制核攻撃によるいわゆるカウンター・フォース・オプションを採用する方向に向かっているのではないか、ということアメリカの学者が言い出したわけです。

これはどういうことを根拠にしているのか。1 つには、さっき触れたような兵器の開発、ミサイル防衛や MIRV を開発し、巡航ミサイルなどを作ってきたこと。これらを組み合わせると、MIRV だとか短射程のミサイルによってパキスタンの核戦力を叩き、撃ち漏らした分によるパキスタンの報復をミサイル防衛で迎撃する。これでインドは自身が被る損害を抑えたまま、パキスタンに先制核攻撃をかけられるようになる。これらの兵器開発は、そうした戦略追求の反映ではないかというのが根拠の 1 つです。

もう 1 つは、この本を御存じの方はいますか。これは、今の Modi 政権の前の Manmohan Singh 政権の最後の 4 年間のインドの国家安全保障顧問だった Shivshankar Menon という人が書いた本で、インドの外交政策の様々な側面に関して論じています。インドの国家安全保障顧問というのは、基本的にインド政府の中で核政策の中核と言われて

いるのですが、そのポストを務めた彼が、いくつか注目すべきことを言っているのです。それは3つありまして、1つは、敵対国の核使用が差し迫った場合の先制攻撃、いわゆる純粋な先制（pre-emption）は現行ドクトリンのグレーエリアであるということ。それを許容するものをNFUと呼んでいいのかには議論もあるのですが、少なくとも彼はそう言っている。2つ目は、対価値攻撃、ターゲティングに関して、「当初は対価値攻撃が合理的であった」と過去形で述べられていること。3つ目に、パキスタンによるインドの通常戦力の部隊に対する戦術核兵器の使用は、「包括的大規模先制攻撃」を行う自由をインドに与えると述べていることです。

これらを引いて、Vipin Narangという人が、インドはそういう大規模な先制攻撃オプションをパキスタンに対して採用しようとしているのではないかと、言い出したわけです。この指摘は、大きな論争を巻き起こして、インド人はそんなことはないと怒りました。なぜそうした反発がインドから巻き起こったかという、それだけインドの今までの核戦略のイメージからかけ離れる指摘だったからです。

ただ、私は、実際にインドがそうした路線をとっているかどうかということ以上に、仮にこの種の戦略へのシフトをインドが図っているとしても、それは実はそこまで新しい話ではないと思っています。先ほど触れた、大量報復原則の合理性、インドの国内でそれが合理的だと考えている人たちの論理を見ると、そこで既に、相手国の第一撃に対して大規模報復で返すことで損害限定をするという発想があるわけです。インドの元戦略軍司令官も、だから大量報復原則は合理的なのだと実際に述べていたことがあるのですが、そこで既に、カウンター・フォースの発想が見られるわけです。その上で、もし本当にMenonが言うとおりの現行ドクトリンのNFU上、相手国の核攻撃が差し迫った場合の先制攻撃はグレーエリアなのだとなれば、この種のオプションをインドがとったとしても、それは現行ドクトリンの範疇から外れるような新しいことではないと言えます。言い方は悪いですが、広義の大規模「報復」の形態をどうするかという選択の問題に過ぎないわけです。

もちろん、実際にインドが今後そうした方向に向かうのかどうか、今の時点では判断が付きません。ただ、これが従来の政策の延長にすぎないのだとするならば、インドのハードウェア、とりわけミサイル防衛だとかMIRVだとか巡航ミサイルなどがどんどん伸長するにつれて、漸進的にターゲティングがそういう方向に振れていってもおかしくはない。他方で、この種の戦略を明確に追求すべき目標としてインドの政治指導部が受け入れるかという、それはインドの政軍関係との関連ではなかなか難しいのではないかとも言える。

ですので、漸進的なシフトがあり得るのではないかと私は思っています。

ということで、最後、印パ間の抑止をめぐる安定性について。こうした印パの核の抑止をめぐる状況を、今日どう見たらいいのか。最大の論点は、本当にこれが不安定なのかという点でしょう。印パの核の抑止の状況については、アメリカ人がよく、不安定だ、いつ核戦争が起こるのかわからないと言います。この間出たトランプ政権のNSSですら、印パ間の核の状況は不安だと書いてあったくらいです。ただ、本当にそこまで不安定なのかと言えば、私は結構疑問だと思っています。

理由は大きく分けて 3 つあります。1 つには、パキスタンの戦術核兵器が、先ほど触れたように War-Fighting weapon ではないのだとすれば、それは必ずしも早期使用には向かないものです。戦術核戦争に訴えても勝てないとすれば、使ってもその後が続かない。そうすると、仮に印パ間で事が起こっても、そう簡単にパキスタンが早い段階で核の敷居を越えるとは考えにくい。一方のインドはどうか。限定オプションはないとして、先ほどの損害限定に関しても、漸進的なターゲティングのシフトはあったとしても、インドの政軍関係等との関係を考えて、明確にインドがそれを追求していくとも考えにくい。そうすると、非常に中途半端な損害限定戦略をインドが採用する可能性があります。そうした「中途半端」な戦略によっては、恐らくそれほどインドにとって先制核使用のハードルは下がらない。要するに、印パいずれにとっても核使用のハードルは高いままということになります。

さらに翻って、核より低いレベル、印パ間の通常戦争レベルとか、さらに低い低強度紛争レベルの状況というのは、実はだんだん安定化してきています。インドは、2004年に掲げた限定通常戦争ドクトリンを事実上諦めたと言われています。さらに、核兵器を盾にしたと言われるパキスタンの代理戦争は一時期激化しましたが、最も深刻だったころと比べると、近年では事件数・死者数の桁が 1 つ違うくらいにまで穏当化してきています。そうすると、実は印パ間の状況というのは比較的安定しているのではないかと。もちろん低いレベルでの暴力、低強度紛争は続いています。ただ、これはエスカレートすることはない、いわゆる「醜い安定 (ugly stability)」と言われる状況が続いているというのが私の見方です。

すみません、1 時間の予定がちょっと話し過ぎました。(拍手)

○岩間氏 ありがとうございました。

わからないことだらけなのですから、随分時間がたちましたので、ちょっと休憩を

入れて、7～8分後に再開したいと思います。

(休 憩)

○岩間氏 では、再開したいと思います。

私よりずっとわかっている方がフロアにいっぱいいらっしゃるのですけれども、ど素人の質問を先にしてしまいますが、そもそも印パキの核の世界で戦略・戦術、戦域という区別はあるのですか。

○栗田氏 戦域は基本的に聞かないですね。

○岩間氏 戦略・戦術ってどうやって分けるのでしょうか。

○栗田氏 彼ら自身、戦略・戦術というのを明確に定義して分けているわけではないと思います。むしろ逆に、それらが一体で明確に切り分けられないというのがまずある。ただ、何となくのイメージ上、彼らの中での「戦術」レベル、印パの文脈で言われる戦術核兵器というのは、攻めてくる機甲部隊、特にインド側の機甲部隊に対してパキスタンが使うものを指します。

○岩間氏 でも、カシミールを今占拠しているのはインドなんですね。

○栗田氏 ごめんなさい。ややこしいのですが、カシミールでは使わないんですよ。あそこは平原ではないので。厳密に言うと平原が少しはありますけれども、核使用が想定される戦場はカシミールじゃないんですよ。

○岩間氏 地図を出していただけるとありがたいのですが。そもそもどういう戦争になるのかが全く理解できなくて。

(プロジェクターで地図が映し出される。)

○栗田氏 冒頭で申し上げたカシミールだけの問題ではないというのが、ここで関係してくるのですけれども、ここが係争地、カシミールなわけですね。ただ、印パ間の戦争のメジャーな戦域というのは基本的にはここじゃないんです。ここなんです。機甲部隊が越えられるのはここしかないのです。逆に、ここはもう山岳地帯で……。

○岩間氏 オペレーションが無理。

○栗田氏 オペレーションが無理なので、基本的にこっちなんです。

○岩間氏 下の方では一応、戦車が進もうと思えば行ける？

○栗田氏 こっちは砂漠なので、ここの範囲で行けます。ですので、使うならこの辺でと

ということです。

○岩間氏 その場合は、どちらが先に攻めてもおかしくないような状況があるわけですか。

○栗田氏 ただ、どちらかというところ、結局通常戦力バランスの問題もあって、ここへ先に入り込んでくるのはインド側だろうと思います。

○岩間氏 それは通常兵力が強いから？ 要するに、冷戦の頭でいうとこっちがソ連ということですね。

○栗田氏 こっち（インド）がソ連です。

○岩間氏 わかりました。ありがとうございました。

では、フロア、いろいろな質問があると思いますけれども、どうしましょう、沼田大使、最初にコメントなさいますか。

○沼田氏 先に言っちゃうとどうかな。僕の話はあとで。

○岩間氏 そうですか。では、後ほどまた。

○吉田氏 吉田と申します。私もど素人なので。

今日の話は非常におもしろかったのですが、核拡散という視点で、アジアには潜在的に核保有を希望している、期待している、希求している国って結構あると思うのです。韓国もそうでしょうし。長くアメリカの勢力で止められているのですけれども。

今日の話の中で、インドとパキスタン是非対称だと。韓国は核武装をしたい。別に韓国にこだわっているということはないのですけれども。例えば日本との関係で非常に非対称、何とか核でもってリカバリーしたいという信念があると思うのです。今、世界で核を持っていないけど核を持ちたいという国にとって、インドとパキスタンの教訓というか、インドと特にパキスタンが核を持つに至った歴史と経緯ですね。どこをどうした点が教訓になるのか。まさに今日のテーマである核不拡散体制との絡みで言うと、栗田さんが、これから持とうとする国にとってはどこを学んだらいいのか。逆に、パキスタンとかインドの核保有の歴史というのはどこが教訓として与えられたかという視点の質問です。済みません、難しいかもしれない。

○栗田氏 教訓といふとなかなか難しいですね。ただ、パキスタンの側について見ていておもしろいと思うのは、彼らがもともと果たしてどれだけの核兵器を持とうと思っていたのかという点です。核兵器を持ってどれだけの問題が解決すると考えていたのか、逆に言えば、彼らの抱えていた問題の中で、核兵器を持てば何が解決すると思ひ、それにはどれだけの核兵器が必要だと思っていたのか。

これは結構難しい問題で、パキスタンの国防大学のある研究者によると、当初は2〜3個でいいと思っていた人たちがパキスタンのエリート層にはいたそうなのです。2005年に、さっきも触れたとおりムシャラフは、必要な最小限抑止のレベルに達したと宣言している。当時核弾頭数は大体60発ぐらいだと言われていた頃ですが、それで目標に達したということなんです。他方、今アメリカ人が一番よく言及する、今後のパキスタンの核弾頭数増加の見込みは、2025年時点で250です。

以前、パキスタンの核政策全般を管轄する、戦略計画部（SPD）という軍関係の機関の人としゃべっていたときに、これだけの数の核弾頭を持つことになるとパキスタンが本当に最初から思っていたかと聞いたら、それは思っていなかっただろうと言っていました。だとすると、核保有の直後の頃、パキスタンでもよくあった議論として、核兵器というのは安上がりに安全保障を担保できる手段だということが言われていたわけですが、思っていたほど本当に安上がりだったのかと言えば、それは思っていたほどには安上がりではなかったと思うのです。もちろん、効果が全くなかったというわけではないのですが。

もう1つは、核保有に当たって抱いていた目標を本当に達成できたか。確かにインドは攻めてこないと思いますけれども、一方で、核保有してから30年間たって、その間テロ支援をずっとやっても、カシミールは取り返せない、これが現実なのです。一方で、インドはどんどん台頭していってしまっていて、最近はパキスタンを相手にしなくなり、パキスタンは最近では日本国内でさえもテロ支援国家と言われるようになってしまったと。そういう意味では、パキスタンが本当に最初に核兵器に期待したものがそもそも得られたのかと、それを得るために何を持つことが必要なのかに関する見積もりが正しかったかという部分を見る限り、実はそこまで核兵器に大きな期待を寄せるのは正しくないのではないかと。教訓として1つ挙げられるのはそこなのではないかと思えます。

○岩間氏 そもそもそれは目標だったんですか。カシミールを取り返す。

○栗田氏 カシミールを取り返すのは、もう70年間ずっと目標なので。今でもです。

○岩間氏 でも、核兵器を持つことでどうやって取り返そうと思っていたのか。

○栗田氏 代理戦争を激化させられるんじゃないかという期待は多分あったんですね。特に、持った直後の頃。

○岩間氏 カシミールの中で？

○栗田氏 主にはインド側カシミールの中で。核保有後、実際反乱が激化していきまして、それが全て核兵器のせいだったかはともかく。ただ、今日はグラフを出していないのです

けれども、パキスタンの代理戦争というのは 2000 年代の頭をピークにどんどん沈静化してくるのです。結局のところ、核兵器があってもできること、できないことというのは大きくは変わらなくて、核保有以前にできなかったことは、核を持っててもできないということになるのかも知れません。

○村野氏 お話、ありがとうございます。本当にいろいろ詳しく勉強になりました。

関連する質問が 2 点あるのですけれども、両方ともパキスタンに関するのですが、1 点目は、パキスタンの中で核を使用した作戦のプランニングがどうなっているかという話で、スライドの 11 ページ目に「意図せざるエスカレーションの不確実性が戦術核兵器の抑止力」という引用があると思うのですけれども、実際に先ほどインドの Cold Start とのつながりで、それに対して核を使う、使わないという話があったと思うのですけれども、パキスタン側でどういう状況になったら通常戦争から核を使用した戦争に移行するかというプランニングというのが、あらかじめ明確なものが決まっているのかどうか。あるいは、状況に合わせて使っていくということなのかというのが 1 点です。

もう 1 点は、同じこの意図せざるエスカレーションの不確実性に戦術核の抑止力を見出しているというのは、僕が聞いていて、最近、アメリカの戦略家がロシアの核戦略を見るときに、escalate to de-escalate ということを行っていますよね。つまり、ロシア側はエスカレーションを止めるために意図的にエスカレーションに出てくるのではないかと。それは実際に核を使うかどうかに限らず、本当に核を使うかもしれないし、核を使うかもしれないという、いわゆる nuclear blackmail のようなものをシグナリングとして発して状況のエスカレーションを止めようとするという発想、それと似ているのかなと思ったのですが、それと同じようなものだと考えていいのかどうかという 2 点をお聞きしたいと思います。

○栗田氏 ありがとうございます。簡単なほうからお答えすると、私、2 点目については多分似たような発想なのだろうと思っています。だから、ある種のシグナリングというか、警告射撃というか。さかのぼると、フランスの核戦略にあった“pre-strategic weapon”に近い、そういうイメージで捉えていいんじゃないかと思っています。

○村野氏 仮にウォーニングショットをするとすると、インドは具体的にどういう使い方をするかというのは何か想像できますか。

○栗田氏 具体的にどこで使うかというのは、それもいろいろな人がいろいろなことを言っているのですが、正直わからないといえばわからないのですが、恐らく最初にウォーニング

で使うとしたら、パキスタンが入ってきたインドの機甲部隊に対してパキスタンの国内で使うだろうと。

○村野氏 例え僕らがウォー・ゲームのシナリオとかを書くときには、北朝鮮が日本海で核爆発を起こしてみたいなことを時々やるんですけども、そういった想定じゃないわけですよ。

○栗田氏 結局、そうすると、こっちで抑えなきゃいけないわけですよ。

○村野氏 では、少なくともインド側としては、パキスタンから何らかの飛び道具関係のものが飛んできたときに、それが核かどうかというのを判断できるような早期警戒というのは持ってない。では、余計危ないわけですね。

○栗田氏 逆に言えば、その辺を踏まえた不確実性がある種パキスタンの抑止上の梃になっているところもあります。あと、さっきのプランニングの件ですけども、どういうプランニングがあるのかは正直よくわかっていません。そこは全く公には出てこないの、ブラックボックスなのですが、我々がパキスタンの戦略家とか退役軍人なんかとしゃべっていると、どこまで本気でちゃんとその辺の **War-Fighting** を、核使用後の展開というのを考えているのかなというのが結構疑問なのです。「その後」の話にならないんですよ。

○村野氏 今日 3 つ目の質問かもしれないですけども、感想なんですけれども、栗田さんみたいな専門家がインドとパキスタンの文献であったり政府高官の話を両方見聞きして、お互いの関係というのは結果的に安定につながるだろうという結論に至るといのはわかるんですけども、それを印パキの当局者同士が本当にそう認識しているかはかなり怪しいんじゃないかなというのが僕の今日聞いた感想だったんですけども。

○栗田氏 そこに関して一つおもしろいのは、インド人は、そんなに早くパキスタンが核兵器を使うとはあまり思っていない印象を私は持っています、どちらかというと。つまり、やはり合理的に考えると、パキスタンにとって核兵器を使ったとして、その出口はないわけですね。そうすると、本当にパキスタンがそれこそ半分なくなるような事態に陥らない限り核兵器は使わないだろうという読みがインド側にはあって、それはある種正しい。

○岩間氏 済みません、全然わからないですけども、半分なくなるような事態というのは、要するにがっとうインドが入ってくるわけですよ。半分なくなってから使っても遅くないですか。

○栗田氏 遅いんですよ。

○沼田氏 話は戻りますけれども、今の答えに少しなるんじゃないか。済みません、遅れ

て来て、お話を聞いただけで話をするのは。元パキスタン大使の沼田です。

私がパキスタン大使をしていたのが 2000 年 4 月から 2002 年 10 月ですから、まさにそのツインピークスの際に最初から最後までいたわけです。

それで、当時の私のメモなんかをちょっと振り返って見たんですが、あの頃どういうふう感じたか。何もわからなかったというのがまず正直な感想です。もちろん、パキスタンの軍の人は何も言わないしね。インドと戦争になるかもしれないという状況だから。

その中でいろいろ取材したんですが、そのときにどういうことを聞いたのかということをお話しすると、今はもう機密じゃないと思うから言えますけれども、例えばパキスタンのドクトリンがどうなっているかということについて、これはタラト・マスードという元国防調達次官。私、パキスタンにいたときに何人が頼りにしている先生みたいな人がいて、タラト・マスードさん、それからヤクブ・カーン。

○栗田氏 元外相の。

○沼田氏 あたりに聞いていたんですね。あと、イギリス大使、ヒラリー・シノット、この本の索引にも出てくるけれども、その 3 人に聞いていたんです。例えばタラト・マスードが言っていたのが、パキスタンのドクトリンは、これは 2002 年 5 月の状況です。まさに……

○栗田氏 一番大変なときですね。

○沼田氏 一番大変なとき。なぜかという、私が東京に電報を送って、ある程度見通しを書かなきゃいけないわけですよ。核戦争になるかもしれないとみんな心配しているところで。そこでどういう電報を送っていたかというのが本当の話なんですけれども、タラト・マスードが言っていたのは、パキスタンのドクトリンは核の先制使用を許さない、それからカウンター・フォースよりもカウンター・バリューに重点を置く。なぜかという、カウンター・フォースの場合、さっき岩間さんが言っておられた、パキスタン領内に侵攻してきたインド部隊をたたくためパキスタン領内で核兵器を使用すると、その過程でインドの侵攻部隊のみならずパ自身施設の施設及び市民に多大な核被害が出る。だからそう使えないという話なんですね。

その頃にいわゆる限定的戦争というのがあるかどうかというのがまさに議論になっていたわけです。これは 2002 年 5 月 22 日にタラト・マスードに聞いた話なんですけれども、そのときに彼が言っていた考えられるシナリオは、インドがライン・オブ・コントロールを越えてテロリストキャンプ、訓練地域、居住地域などを空爆すると、インドがアーザー

ド・カシミールの一部地域に地上侵攻すると。そうすると、戦闘がライン・オブ・コントロールのみならず南のほう、国際国境まで波及して全面的通常戦争になり得ると。その場合はシンド州の南部が弱点だと。一番南のほう。

そうなると、パキスタンが死に物狂いの措置、out of desperation でインド側の侵攻部隊に対して核兵器を使用する可能性が考えられると。しかし、それにインドが反撃すると、お互いに軍事基地、戦車部隊に対する核攻撃ということになって、その場合、戦略的縦深性 (strategic depth) を欠くパキスタンがインドの都市部人口密集地域に対する核攻撃をする可能性がある。それにインドが反撃するとパキスタンが消えちゃうと。そういうシナリオ。これがタラト・マスード。

それから、ヤクブ・カーンさんの話は、インド側が通常の戦争を続けていけば、どこかの時点でパキスタンが音を上げるとの想定に立って限定戦争を考えているのであれば極めて危険だと。パキスタンの核抑止の考えは、例えばボンベイのような都市に核攻撃を加え数十万～数百万の犠牲者が出れば、インド側もそれ以上の犠牲者は許容し得ないのでエスカレーションが終息するといったような発想に基づいているものと思われるが、問題は——この辺から話が恐ろしくなるのですけれども——実はインド側が、例えばアーザード、ジャンムー・カシミールをとれば、ボンベイのそのような損失もやむを得ないと考えるのか否か、いかなる得失の計算を行っているのか全くわからないことであると。向こうの得失計算が。いずれにしても、広大な国土に人口密集都市が分散しているインドは、何かを獲得することの代償としてある程度の核兵器の被害は吸収し得ると思われるのに対し、インドに対してはるかに戦略的縦深性が乏しい、要するに狭いパキスタンが一旦インドから何かをとることの代償として核の被害をあえて受け入れるとのゲームを始めると、瞬間にインドに全ての戦略拠点とか中央都市を破壊されてパキスタンというのが消滅することになりかねないと。こういう話があるのです。

あと 1 点だけ。イギリスの大使に当時聞いたのですけれども、これも同じような日です、この 5 月のその辺のとき。イギリスの大使が、核戦略の理論からいえば、インド側の進撃に対してこれを抑えるために、インドの侵攻部隊に対して高空域から戦場核を落とすといういわゆるカウンター・フォース手法が考えられるけれども、これはさっき言ったことと同じで、インドの攻撃がパキスタンの人口密集地域に及びかねないと考えた場合、危ないから——ここから後が怖いのですけれども——そういうカウンター・フォース段階を飛び越えて最初から全ての核を使ってインドの人口密集地域を攻撃する可能性も考えられない

わけではないという話をされたのです。そういうところでパキスタンの核兵器ドクトリンが全く明らかにされていない状況のもとで、パの世論は核の恐ろしさについての理解を著しく欠き、核の先制使用も辞さずとの立場がいかなる結果をもたらすかについて認識していないことを憂慮していると。それがまさに私が心配していたことです。

それからその後、あなたの本を読んで、核戦争はなさそうだなと思って、よかったなと思ったんですけど。

○岩間氏 ありがとうございます。何かレスポンスされますか。

○栗田氏 沼田大使の今のお話を伺っていて、1 つすごく興味深く、逆にお聞きしたいなと思ったのは、この当時パキスタン指導部が実際に何を考えていたのかというのが、私もいまだいろいろ研究していても全然わからないのです。パキスタンの国内の戦略的なナラティブの中では、後付けで都合のいいように解釈するところがある。核の抑止が効いたからインドが攻めてこなかったんだというナラティブが、パキスタンでは以前からしばしば出てきますが、そのナラティブの中に今お話のあった 2001 年から 2002 年の危機というのも組み込まれていて、核抑止が効いた事例なんだと彼らは言うわけです。しかし、去年かおとしに毎日新聞のインタビューにムシャラフが答えていて、日本語のほうでもたしか出ていたと思うんですけども、あのとき正直なところ、本当のところは何をを考えていたのかという質問に、建前なのかどうなのかわかりませんが、彼自身は、核兵器をいざとなったときに本当に使えるのかと、本当に使いたいのかについて考えて、非常に眠れない日々を過ごしたと答えている。この辺を勘案すると、あのときパキスタン自身の抑止力を、パキスタン指導部がどう考えていたのかというのは、なかなか難しいところだなと。

○沼田氏 ムシャラフは本音を言っていたんだと思いますよ。だから、我々は外から見ていてわかるわけがないわけですよ、どのような仕事をしているのか。だから、本省にどう報告したらいいのか困っていたという。

なぜ困っていたかということ、2002 年でしょう。2001 年、9.11 があったわけですよ。9.11 のときに我々は邦人退避勧告じゃないけれども、商用機が飛んでいるうちに邦人は帰ってくださいという話をして帰しちゃって、我々大使館員だけ残っていたんですよ。それが 2001 年 9 月 11 日から 12 月ぐらいまで続いた状況。

今度、2002 年 5 月ごろになったらまさにツインピークスで、これ実は平林大使のほうか騒いでおられたと言うとあれなんだけれども、インドの方が危なくなってきた、アメリカも大分圧力をかけて、アメリカ人を退避させるとアメリカが言ってきたでしょう。それが

飛び火してきて、我々も退避しなきゃいけないということになったわけです。退避させなきゃいけない。そういう状況での会話が今の会話なんです。要するに、どうなるかよくわからないというところで。私の感じは、ムシャラフは恐らく正直に言っているんだろうと。

さらにもう1点つけ加えますと、そのころ、6月の初めですけれども、パキスタンのザ・ニューズが主催したラウンドテーブルというのがあって、そこで随分いろいろな議論があったんです。例えばイスラム政党の人なんかは、限定戦争あり得べしと言っているわけですよ。怖いんですよ、本当に。それに対してタラト・マスードさんはさっき言ったような議論で、限定戦争なんていうのは幻想だということを書いて、私もそれは危ないよという話をして、そのときに、この本の索引に出てくるフッドボーイ教授、彼も危ないということを書いてた。私も危ないと言っていたんですけれども。だから、本当に混沌としていたというのがあのころの状況です。

あと1つつけ加えれば、インドは一応シビリアンコントロールが効いているでしょう。

○栗田氏 一応は。

○沼田大使 一応は。パキスタンは軍しかやっていませんから、シビリアンコントロールというのはないし、それから本当に **strategic thinker** がいるのかどうかよくわからない。あえて探せば、この本に出てくるリファート・フセインとか何人かいるでしょうけれども、私がいた頃は余りそういう人が議論しているという感じもなかったし。それから、急進イスラム勢力が騒いだ場合にどうなるかという問題があるし、シビリアンコントロールというのが逆の方向に働くかもしれない。そういう意味では心配というのがあると思います。

済みません、延々としゃべって。

○岩間氏 済みません、また素人の質問をしますけれども、パキスタンの核戦力のところを飛ばされたんですが、これによると 2,000km ぐらい飛ぶのがどれくらいあるんですか。

○栗田氏 ここでは Hans Kristensen と Robert Norris 論文の表を転載していますが、この表のミサイルの数自体は必ずしも一般に余り広く引かれていないので、話半分に聞いてください。岩間先生が今おっしゃったような射程 2,000km を超えるものというのと、シャヒーーン 3 というミサイルが 2,750km。あとは、ついこの間実験がされた、MIRV が搭載されると言われるアバビールというミサイルが 2,200km です。2,000km を超えるものはこの2つだけです。

○岩間氏 それ以外は数十～数百 km しか飛ばない？

○栗田氏 ということになります。この 2,750 というのは、明確に根拠のある数字で、正

確な場所は忘れましたが、パキスタン国内のインド国境から結構離れたところから飛ばしても、インドの全土、特に一番離れたアンダマン・ニコバル諸島が入る射程です。

○岩間氏 何とか諸島はわからないので、もう一度地図をお願いします。

○栗田氏 ベンガル湾のほうに。

○岩間氏 そもそもどの辺から撃つんですか。

○栗田氏 多分パキスタンの南の方から撃つ計算です。アンダマン・ニコバルにはインド軍の統合コマンドがあって、ここまで入るという射程が 2,750km。

○沼田氏 バロチスタンの奥の方から撃つんですかね。イランとの国境。

○栗田氏 そうですね。あっち（バロチスタン）のほうからだと思います。

○岩間氏 それは移動式なんですか。固体燃料。

○栗田氏 固体です。

○岩間氏 一応ある程度の非脆弱性はあると。

○栗田氏 あると思います。

○岩間氏 では、一番最初の村野さんの御質問、ウォーニングショットでそれを撃つという選択肢はないんですか。その最後のとっておきなんですか。

○栗田氏 さすがに多分、それをいきなり撃つという話は余り聞いたことがないので。

○岩間氏 もっとたくさん持っている短いを使うという発想になっている。

○栗田氏 そのお話を聞くと意識するのですが、やはり発想が陸なんですよ、彼らは。洋上へのウォーニングショットというのがあり得ないかと言われると、100%あり得ないとは言えないですけども、ただ、パキスタン人の議論なんかを見ている限り、やはり 1 発目は基本的にはパキスタン領内の陸上で、侵攻してくるインド軍に対して使うというのが想定される場所です。ええっと思われるとは思いますけれども。

○岩間氏 ヨーロッパの場合も、ソ連が攻めてきたときにドイツ領内から撃つわけですけども、どのタイミングでどうやって撃つかに関して延々と西ドイツとイギリスで意見が合わないわけですよ。西ドイツは、やはり自分の領内で撃たれては困るし、東ドイツでも困ると言うわけですよ。そういう声はパキスタン国内からは起こらないですか。普通の人々はもう全然違う世界で生きているんですか。

○栗田氏 としか言えないと思います。

○岩間氏 他の方、いかがでしょうか。

○松本氏 名古屋市立大学の松本と申します。

私は全然核とか安全保障が専門ではなく、普通に外交史を研究しております、あと国際政治史で、特にイギリスの外交史に関心があるというところでカシミール問題というのは非常に関心を持っております。

直接核の話も絡めて聞かせていただきますが、カシミール問題をめぐってパキスタンが実効支配、それからインド側ということで、一方で、インド国内でイスラム系のテロ活動という話もありまして、そういうところでパキスタンはテロ支援国家と書いていいのかというところと、あと、向こう側にあるアフガニスタンとの関係というところが私は非常に気になっておまして、例えばタリバン政権とパキスタンというのは非常につながりが深いという問題もあって、つまりそういう核技術とか核的なものがイスラムのテロリストに渡るとはならないかというような話も一時、最近は何も言われなくなりましたが、その辺のことが印パ関係ではどうなのかということが1点。

それから、今度は中国との関係でありまして、中国から大分パキスタンは核の技術面とか物資の面で支援を受けているという話が出てまいりましたので、その辺ちょっと関係ないことをついでに聞いて非常に恐縮ですけれども、今起こっているウイグル問題があるじゃないですか。私の関心が宗教をめぐる紛争というものにあるもので、どうしてもムスリムの問題ということで、現時点では、今まではパキスタンと中国というのは非常に親和的というか友好関係にあったということなんだと思うんですけれども、例えばウイグル問題なんかをめぐって中国とパキスタンとの関係というのはどうなっていくのか。それが核戦略的な、中国とパキスタンに核をめぐってはいろいろな技術移転的あるいは物資を供給してもらったりするような関係があるという説明があったんですけれども、そういうことでどうなるのかというところがちょっと知りたいので、よろしく願いいたします。

○栗田氏 御質問ありがとうございます。イスラム武装勢力、例えばアフガンとのつながりもあって、核兵器のセキュリティーとか、そのあたりがどうなっているのか。パキスタンは核兵器をすごく一生懸命守っているのです。制度的な面で言えば、パキスタンは非常に重層化された核弾頭のセキュリティーのシステムというのを構築していて、これはなぜかという、タリバンのようなイスラム武装勢力との関係があって、彼ら自身、過激派の核兵器へのアクセスを懸念しているから。さらには A.Q. Khan 事件の余波もあります。A.Q. Khan ネットワークが明るみに出て、あれで彼ら自身のレピュテーションがどれだけ傷ついたかというのは、パキスタン自身はよくわかっているのです、だからこそ重層的なセキュリティー措置というのをとっていますし、さらには、この分野ではかなりアメリカか

らもいろいろな協力を得ている。実際この協力で何をやっているのかというのは公には全く出てきませんが、少なくとも、かなり核セキュリティーの確保には力を入れているということになります。

ただ、問題は、パキスタンはそういう分野でアメリカからの協力を得ている一方で、アメリカを潜在的には自分の核兵器の芽を摘もうとしている脅威だとも思っているのが、アメリカに見つからないように核兵器を国内でうまく移動させようとかするとき、セキュリティーの面で懸念されるようなよくないことをやるわけですね。例えば、普通のトラックに積んで一般道路で核物質を運んだりしていると言われてるので、そのあたりでちょっと大丈夫なのかということはありません。

あとは、インドに関して言うと、インドは確かにシビリアンコントロールの国なわけですが、インドのほうが逆に核セキュリティーは危ないんじゃないかと一時期言われていたこともある。

それから、もう 1 つのウイグルと中国とパキスタンの問題ですが、基本的にパキスタンにとって、同じイスラムであってもウイグルというのはやはり遠い存在なので、中国との関係を犠牲にしてまでウイグルの人々を助けるという頭は全くないです。むしろ逆に、パキスタンの国内にいるパキスタン政府の統制すらきかない武装勢力が、ウイグルの武装勢力とつながりを持っていた。それに中国が怒って、パキスタン政府がその手の武装勢力を掃討したのですが、逆の方向はないと考えていただければと思います。

○太田氏 ありがとうございます。共同通信の太田です。

まず、沼田大使の取材力に感服いたしました。ありがとうございます。マスードとか取材したくなってしまいました。ありがとうございます。

○沼田氏 彼はニューズウィークか何かに書いていますよ。もう相当年ですけども。

○太田氏 また教えてください。ありがとうございます。

Vipin Narang のすごく炎上した議論の關係のメノンの話を聞いていて思ったんですけども、そもそもインドがノー・ファースト・ユースと **Sole purpose** という概念を区別しているのかどうかということですよ。 **Sole purpose** の場合、すなわちアーリー・ウォーニングがちゃんとあるかどうかということから始まって、今インドとパキスタンというのは私はちょっと存じ上げないのですけれども、例えば相手方が弾道ミサイルを撃ちそうだとところをキャッチするアーリー・ウォーニング・システムというのは持っているんですか。——全くない。では、地上レーダーだけですか。

そうすると、ノー・ファースト・ユースと **Sole purpose** の概念を区別するということはインドの国内ではどこまで議論されているのか。すなわちグレーエリアというのは恐らくノー・ファースト・ユースというよりも、狭義の **Sole purpose**。ノー・ファースト・ユースって結構幅が広くてあれなんですけれども、**Sole purpose** だと、アーリー・ウォーニングで相手が撃ってくる場合は、座して死を待たずにこちらから仕掛ける。すなわち結果的にこっちの方が先に相手方に着弾するという選択肢もありだと思っんです。だから、そこでグレーエリアという議論をされているのに当たって、**Sole purpose** とノー・ファースト・ユースの識別・区別というものがどこまで厳密に行われているのかということをお聞きしたいのが第1点。

あと、アーリー・ウォーニングがないということで、コマンド・アンド・コントロール、**C3I** ですね。特にアメリカなんかは核も通常戦力も結局一緒になっていて、だから今回、トランプの **NPR** で **C3I** をやられた場合は、非核戦略攻撃としてこれは核攻撃の報復たり得るとというのが今回の **NPR** の一つの肝なわけですけれども、**C3I** がどうなっているか。仮に **C3I** がやられた場合、それは核のシステムにも当然影響が出ますから、核を統制する、核使用をするために機能させるべく **C3I** がやられた場合は、どういう対応をそれぞれとるのか。インド・パキスタンにそういったプランニングがあるのかどうかということをお聞きしたいのが2つ目。

最後に、レジュメにあったんですが言及されなかった米印協定。これは結局何が問題かといったら、使用済み燃料の再処理によって民生用のプルトニウムがじゃんじゃか出てくると。インドは最終的にトリウム、3段階で、要するに高速増殖炉を使って最後はトリウム炉でやると。ウラン 233 とかトリウムはたくさんありますから。火種としてプルトニウムがたくさん必要だから、プルがとにかく必要だから再処理したい。それはアメリカも日本も認めちゃったということがあって、その米印協定、日印協定というものがパキスタンの戦略思考というか、特に核のパリティーをインドと数量的に築くに当たってどういう影響を与えているのか、全く影響を与えていないのかどうか、そこを御存知なら教えていただきたいということです。お願いします。

○栗田氏 非常に難しい質問をありがとうございます。

まず、**NFU** と **Sole purpose** の問題、特にいわゆる先制 (**pre-emption**) が入るのか入らないのかというのをインドがどう捉えているのかということに関してです。メノンの議論が1つ新しかったのはこの点です。もともとインドの議論の文脈では、彼らの考えてい

る NFU の中で、この種の先制は許容されていなかったはずなんです。2012 年に India' Nuclear Doctrine: An Alternative Blueprint という、インドの著名な戦略家や元当局者らが連名で出したドクトリン見直しに関する提言があって、その中に NFU の見直しの提言が実は 1 個入っている。そこで何を言っていたかという、この種の先制を可能にするために NFU の文言を変えて、インドは先に核使用を initiate しないというものにすべきだと。その initiate には、発射に向けた準備などが含まれるものとされていて、逆に言えば発射の兆候のような動きを感知したら、それはもう相手が先に initiate したと言えるので、そうした場合に核使用に踏み切れるようにすべきだという提言が入っていた。それを見る限り、そうした先制は既存の NFU に入らないと明確に区別していたものだと思っていたんですが、メノンがここで、そこはグレーエリアだと言ったことによって、そのあたりインドの国内での整理がどのようになっているのか、私自身ちょっとよくわからなくなっています。ただ、議論の経緯からするとそのようになっているというのが 1 点です。

それから 2 点目の、詳細は正直わからないんですが、少なくとも彼らが建前上言っているところからすると、まず通常戦力とは完全に分離している。

○太田氏 両方ですか。

○栗田氏 両方です。インドもパキスタンも通常戦力の指揮系統とは完全に分離した立て付けになっていると言われていています。インドの場合は、首相府から国家安全保障顧問を経由して、そこから一切軍全体の指揮系統を通らず、そのまま戦略軍 (strategic force command) に下りる指揮系統があると言われていています。パキスタン自身も、少なくとも通常戦力と指揮系統は分離していると言われていています。

○太田氏 ハードはどうですか。ソフトはわかるのですけれども。

○栗田氏 ハードは、ごめんなさい、正直わからないです。ただ、インド自身はドクトリンの中で、そういう場合に備えて代替のコマンド・アンド・コントロールを構築している、それがソフトの面だけの継承の話なのか、ひょっとしたらハードの面まで含むのか。後者の可能性は当然あり得るとは思います。

それから 3 つ目の、米印協定がパキスタン側に与えた影響。パキスタンが原子力協力協定を欲しいと言っているのを御存知の方はいらっしゃるでしょうか。米印協定と同じような、米パ原子力協定が欲しいと。2015 年ぐらいに結ぶ、結ばないという話が一瞬だけ出て消えたのですけれども。あと、今パキスタンも、NSG に入りたいと言っています。

パキスタンは、それこそ太田さんが今おっしゃったとおり、米印協定、日印協定、特に

米印協定の結果として、インドが軍事用の核分裂性物質をどんどん生産できるようになって核の不均衡が崩れるというのをしばしば言いますし、だからこそ米印協定は、戦略的安定の上で問題だったと彼らは言います。ただ、そういう具体的な部分以上に、そもそも米印協定、あとは NSG の例外化措置が、ある種象徴的に、パキスタン側の疎外感を強めさせている面がある。つまり、現行の NPT 体制は自分だけを不当に取り扱っているという印象をパキスタンは元からすごく持っていたのですが、それを、インドをめぐる一連の動きがさらにおおったところは否めない。

NSG ができたそもそもの経緯として、あれはインドの 1974 年の核実験のせいだと言われることがあります。その結果最初に不拡散政策の対象にされたのはパキスタンです。そういう経緯もあって、パキスタンはかなり核不拡散体制に対する被害意識が強い。それを、かなり近年の経緯が強めさせてしまったところはあるのだらうと私は思っています。

○太田氏 補足でいいですか。2015 年だったかな、3 年前に Kidwai が来たんですよ。

○栗田氏 広島に？

○太田氏 長崎かな。私、長崎でちょっと飯を食いながら、この議論をして。ちょうど当時ニューヨークタイムズが、当時のパキスタンの大統領か首相とオバマが会って、そこでパキスタンの NSG 入りと米パキ協定的な議論をやると。これはどうもカーネギーのパークヴィッチが少し入れ知恵を民主党政権にしている、そのときにその話になったんだけど、オバマが出した条件は、インド並みにはいかないけれども、ちょっとインドよりマイナスみたいな感じでやってもいいんだけど、条件はたしか核弾頭の数を制限しろとか軍の話でやたら、軍の核で制限をかけてきたと。Kidwai にもそれを聞いたら、いや、冗談じゃない、あんなディールはと。もういいんだ、俺たちには中国がいると Kidwai は私にはっきり言って、しばらくもうアメリカとはやらないと言い残して長崎を去っていきました。

○合六氏 二松学舎大学の合六です。ありがとうございました。

ちょっとコメントと質問ですけれども、最初は、私はヨーロッパ、特にフランスとかイギリスの核とかを見ていて、インドもパキスタンもフランスの最初の頃の核の戦略に似ている部分。ちょっとずつ違うんですけど、それぞれエッセンスだけを引き抜くと非常に似ているなというのと、あと特にインドのミサイル防衛というのが転換の印になるのか、兆候という証拠になるのかということはおもしろくて、フランスの場合はミサイル防衛に対する著しい不快感、嫌悪感があって、これだけミサイル防衛の話が出ている中で、フ

ランスはその議論が全然出てこないんですよ。この前、フランスの戦略関係の人としゃべっていても、それはないでしょうというのをある種孤軍奮闘してでも意地となっているのは、やはり従来からのドクトリンの継続があって、そういう意味では、今日のインドと——もしかしたらインドは変わっていないというのが今日の論旨かもしれないですけども——比較したときにおもしろいなということが1点。

確認プラスちょっと同じようなコメントなんですけれども、パキスタンの目標というのが、カシミールの奪回というものが最大目標なのか、インドからの陸上での侵攻が最大の目標なのかということによって、彼らが持った核による抑止の効果というのが違う評価になると思うんです。つまり、インドからのマッシブな攻撃を抑止するという観点では、それが実態としてどうかはわかりませんが、核を持ったことによって一応抑止できていると評価できる。他方で、取り返すために核を使うというのはあり得ないと思うんですけれども、それによって紛争が、ある種固定化してしまったわけですよ。つまり、ある種安定化してしまったことによって通常戦力での攻撃がしにくくなったという意味では、今の状況ができないとさっきおっしゃっていたので、そういう意味では、そっちが最大の目標であるならば、パキスタンというのは自ら核を持ったことによって、カシミールをある種スタックさせてしまった部分があるのかなと感じたんです。

何でこれを聞いているのかというと、さっきの吉田さんの今日の教訓みたいなところで、私はウクライナに住んでいたのを御存知だと思いますけれども、ウクライナもやはり核を持つべきだみたいな人がいたときに、東部の今占領されたりしている部分を取り返すべきなのか。彼らの頭にある幻想であるかもしれないロシアがマッシブな攻撃をかけてくるのを抑止するのかといったときに、どういった軍事体制をとるのがベストなのかは変わってくると思うんです。核を持ったところで東部の占領されたところを取り戻せるわけがないんですよ。それはまさに今日聞いていた話をパキスタン側の戦略として思ったので、核を持つちゃえばフローズン・コンフリクトにむしろなっちゃうという教訓としては、もしウクライナの人で核を持ちたいというちょっと右翼的な人がいれば、ある種教訓としてパキスタンを見てごらん、領土はなかなか返ってこない、それでもいいのかということも言えるのかなというのが感想だったので、パキスタンの最大の目標というところを確認したい。

最後が、ちょっと歴史の話。我々は歴史の研究会をずっとやってきたんですが、私のざくっとした印象で、60年代というのはまさにヨーロッパの、特に同盟国の間で核が拡散す

るかもしれない、特に西ドイツに拡散するかもしれないということの懸念があってNPTができた。NPTが68年にできて、その後の70年代はむしろ東アジア、アジア全体に核が広がるかもしれないという懸念が、これはちょっと時代おくれで地域が移る形でやって来たと思うんです。まず最初の兆候が韓国であって、台湾もちろんありましたし、インドが来て、今日の話のパキスタンというところにつながっていく中で、韓国とか台湾というのは最終的にアメリカによって断念させられた部分があるわけですね。もちろん歴史研究あるいは理論研究の中で、彼らが断念してNPTに入るかという中で非常に重要だったのは、彼らに対するいわゆるニュークリア・アンブレラがアシュアランスなわけですね。それがやはりインドやパキスタンというのはしようがないというか、彼らはもちろん同盟を、特にインドの場合は組んでいない中で、自らどうやって守るかといったときに、彼らに核を放棄させる、あるいはそもそも開発段階で断念させるためのインセンティブを与え切れなかったという部分があるんですけれども、今日はインド・パキスタンの2カ国の話だったんですが、歴史的経緯の中でNPTに入る、入らないというところで、他の国、特にアメリカとソ連がそれを持たせないようにやったという経緯というものはあるのかということをお教えいただければと思います。

○栗田氏 どちらも非常に難しい質問をありがとうございます。

1つ目の、パキスタンの目標は何なのかというところ。カシミールの奪還というのは建前としてはずっと変わらずあって、この目標は絶対下げない。ただ、これがフローズン・コンフリクトになったというのは確かに合六さんがおっしゃるとおりなんです、客観的には、パキスタン側にとってもともとフローズンだった。通常戦力でパキスタンが攻め込んでインドからカシミールを取り返せるかといったら、これは無理なわけです。

ただ、それを踏まえた上で、今日パキスタンにとってのカシミールの奪還という目標がどうなのかを考えると、これはパキスタンというのが誰を指すのかも関連しますが、カシミール奪還という目標は、達成できないとしても、そこにあることが大事なんです、特にパキスタン陸軍にとっては。パキスタンの安全保障政策を牛耳っているのは陸軍ですけれども、彼らの組織利益の問題にこれは関係しています。パキスタンの人口は今2億です。インドは13億ぐらいですか。この人口比で、パキスタンの軍隊規模というのは歴史的にずっとインドの約半分なんです。この規模を維持できるのはなぜか。カシミール問題をめぐって対立する、インドの脅威があるからこそです。

そうした組織利益の問題が1つと、もう1つ、パキスタンが永遠に取り返せないはずの

カシミールに執着する理由として面白い議論があります。パキスタンにとって重要なのは取り返せるか取り返せないかじゃない、インドにチャレンジできることなんだという議論です。チャレンジしていることそのものが大事なのであって、チャレンジできなくなったらおしまいだし、逆に言えば、チャレンジしていること自体がある種、自己目標化しているという話がある。他方で、さっきの私のコメントとちょっと矛盾するかもしれないですけども、パキスタンにとって核保有の一番重要だった目標としての、インドに攻められないというところは確かに達成できている。

○沼田氏 ちょっと補足していいですか。カシミールについて、ヤクブ・カーンさんの私の話がもう1回出てくるのですけれども、御存知のとおり、彼は大変な方ですから。彼が言っていたのは、パキスタン人は赤ん坊が物心つく頃から耳元で2つのことを聞くと。1つはモスクのアザーン。それと同時に、カシミール、カシミールと聞いてきたと。それが今言われた永遠に達成できない目標としてあることが重要というのはそうじゃないかという感じがするんです。

それから、今そのときの話の記録を見ているのですけれども。ヤクブ・カーンさんが言っていたのは、2002年5月23日、自分の推測であるが、カシミール問題の最終的解決としてライン・オブ・コントロールを国際国境とするという現状維持方式がインドとしては受け入れ可能なものと思う。インドの計算の1つとして、アメリカもイギリスも突き詰めて言えばこのような現状維持方式を支持するのではないかとの読みがあるものと思う。そのような現状維持方式としては、AJK、カシミール及び北方地域、フンザ、ギルギットとか、それをパキスタンに。それから、ジャンムー及びカシミール渓谷はインドに帰属することとして現状10年くらい凍結し、その間に印パ間の通商を初めとする種々の交流を通じて両国の態度が軟化し、機運が熟せば、帰属の問題は再検討するといったことが考えられるのではないか。全然そういう方には動いていないけれども。でも、ヤクブ・カーンさんは、御承知のとおり、いろいろなコンフリクトの仲裁役をやってこられた方で、彼がそういうことを言っていたと。御参考までに。

○栗田氏 合六さんの2つ目の御質問に対するところで、米ソがアシュアランスを印パに提供しなかったのか、できなかったのか、またそれによって核拡散を抑えられなかったのかについて。実は、インドはそれを模索したところがあります。中国の核実験は1964年が初めて、インドのPNEは1974年です。中国の核実験を脅威に感じて、すぐに核開発に向かったとすると、長過ぎませんか、10年間です。この10年間インドが何をやったかと

いうと、最初にまず米英ソにかけ合ってアシュアランスを得ようとしたわけです、いざ中国から核攻撃をされた場合に備えて。その結果というか、結構真面目に、中国に核攻撃をされたら助けてもらえるものだとインドはしばらく思っていた節があって、だからこそ核実験は遅れた。ただ、幾つかの事件でインド側の信頼感というのが落ちていった。1 つは、1965 年の第 2 次印パ戦争で、当時パキスタンと事実上の同盟国だった中国——今でもですけども——がインドに対して最後通牒を發しました。このときインドとしては非常に脅威を感じたわけですが、これにアメリカが何をしたかという、印パ両方に、紛争当事国だからといってまとめて武器禁輸をかけた。これでアメリカに対するインドの信頼感が下がったというのが 1 つ。もう 1 つは、1970 年代初めの米中和解がやはり大きいです。あれで、いざ中国と何かあったときに助けてもらえないかもしれないという思いが強まった。そうした経緯があって難しかったということです。

それから、パキスタンはどうだったかといえば、パキスタンはとても被害者意識が強い。アメリカのリアシュアランスを信用できる状態には全くなかった。1965 年に武器禁輸をかけられたのはパキスタンもインドも一緒です。ただ、パキスタンはアメリカと正式な同盟条約があったわけですが。安全保障協力条約を 1959 年に結んだにもかかわらず、アメリカは助けてくれなかった。さらに 1971 年には何が起こったか。このときも、アメリカはパキスタンの目からすると助けてくれなかったということです。

もともとアメリカがどこまでパキスタンへの支援を約束していたかという、反共同盟をパキスタンと組んでいるのであって、対ソ・対印同盟を組んでいるわけじゃないので、これはパキスタン側の期待過多というところは否めません。ただ、そういう経緯の中でアメリカの核の傘を提供されても、それを信用できる状態にパキスタンはなかったということだろうと私は思います。ただ、通常兵器の供与で、アメリカが 1970 年代にパキスタンを核開発から遠ざけようとしたのは事実です。

○合六氏 1 点、今日欠席ですけれども、研究会のメンバーでイギリスをやっている小林君という方が、論文も出ていますけれども、まさに 64 年に中国の核実験をやってから 70 年代に至るまでに、いわゆる当時ウィルソン労働党政権のときに、インドが正におっしゃったようにイギリスに駆け寄っていて、イギリスでは真剣にインドまでの拡大抑止というのを検討しているんです。ただ、ソ連にも言っているし、アメリカにもやっているというところで、どういう重複の拡大抑止というのがあり得るのだろうかという中で立ち消えになっていくという話もあるみたいです。

○吉田氏 最初のときは短くと思ってやったんですけども、最後に一言だけ、私の質問ですね。コメントかな。

安全保障、特に核の問題をやっていると、どうしても「抑止」という言葉が必須条件として出てくるのですけれども、今日のお話を聞いていて、パキスタンの出方を見てみると、パキスタンの核の問題と抑止という概念とはほとんど結びつかないんじゃないか。先ほどのカシミール奪回が主目的かどうかという話から、いや、実はそうじゃなくて対インドとの関係だというのですけれども、パキスタンにとって核を持つということが本当に抑止の概念、抑止のコンテキストの中で考えていたのかどうかと、最後になって根源的な質問をしたいのですけれども、その辺いかがですか。

○栗田氏 そこについて言えば、究極的に突き詰めていったとき、インドの通常戦力での侵攻を抑止するという、そういう抑止の概念は、彼らの頭の中に存在してきたということだろうと思います。

○岩間氏 ありがとうございます。もう随分時間も超えてしまったので、このあたりでおしまいにいたしたいと思います。

○栗田氏 こんな本を出しております、今日の話も含めて、印パの核をめぐる関係が、この30年間どう展開してきたのについて、もう少し深く広く書いております。今日実は何冊か持っておりますので、若干割引しますので、もしお買い上げいただける方がいらっしゃったらお声がけください。よろしく願いいたします。

○岩間氏 ありがとうございます。最初に御紹介すべきだったんですけども、勁草書房から『核のリスクと地域紛争 インド・パキスタン紛争の危機と安定』という本を今年の3月でしたか。

○発言者 10月。

○岩間氏 出たばかりですね。9月20日になっています。

○沼田氏 よくこれだけ調べられた。

○岩間氏 沼田大使にはまた別途オーラルをお願いしようと思っておりますので、今日のお話を伺い、ますますその意を強くいたしました。いっぱい現代史の証言を残しておいていただかないといけないなという思いを大変強くいたしました。

今日は本当にいろいろ貴重な話、栗田さん、ありがとうございます。では、これで終わりにしたいと思います。（拍手）